

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「近現代大阪における雑菓子業界についての研究」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 孝夫, NAKAJIMA, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/488

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



氏名	中島 孝夫
本籍	大阪府
学位の種類	博士（地域政策学）
学位記番号	甲 第15号
学位授与年月日	平成29年3月25日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号） 第4条第2項
学位論文課目	「近現代大阪における雑菓子業界についての研究」
論文審査委員	主査：前田啓一 教授 副査：南方建明 教授 副査：坂田幹男 教授 副査：池田 潔 教授

論文内容の要旨

本論文で分析の対象とするのは、大阪において雑菓子の産業集積が存在していたことについて言及し、その歴史的な意義を見いだすことにある。明治初年から昭和の終わり頃までの約1世紀の間、大阪を南北に通じる松屋町筋を中心にあらゆる庶民の菓子を扱っていた菓子問屋が数キロに亘り軒を連ねて菓子関連業者を吸引していた。なぜここに、どのような人たちが、何のために集まり、誰に、何を売っていたのか、そして、なぜ誰もいなくなったのか等々を明らかにしてみたい。

本博士論文において雑菓子とは後述の流通菓子も含めて、松屋町筋などの菓子問屋が扱う菓子の総称であると考え。誕生過程においては無店舗で、製造品の販売をこれら菓子問屋に依頼する製造業者の製品群をいう。これに対し、和洋生菓子とは概ね店舗を有し、消費者に直接販売する業者の商品を指す。さらに、1970年代には菓子の貿易・資本自由化の影響により雑菓子から次第に分離していったのがビスケット、チョコレート、キャンディ等であり、近代的な量産化の可能な商品群である。一方、この時期には流通革命のさなかにおいて大手スーパーなど大型小売店の全国展開が始まり、全国的に流通可能な商品群を流通菓子と称するようになった。

雑菓子とは何か、商品として流通するのには3つの条件がある。甘さがあり、日持ちがし、嵩があり安価なことである。すなわち、高度な技術や機械生産を必要としない手造り商品の煎餅、焼物、一口羊羹、豆菓子、かりんとう、飴菓子等々が代表的な商品である。

当時、雑菓子はまさしく庶民の文化として位置付けられていた。

なお、全国各地に駄菓子という菓子のジャンルが存在する。関東以北の駄菓子は現在でも素朴な郷土菓子としてそれなりの矜持を保持している。しかしながら、関西以西においては、駄菓子は幼い子供向けの安価な菓子として雑菓子とは別扱いとなっていた。松屋町筋菓子問屋街には雑菓子屋と駄菓子屋とが混在しており、駄菓子問屋があった。菓子小売店も別であり、公設市場に駄菓子店はなかった。

ここではまず、本論文の構成について述べておこう。

序章「松屋町筋菓子問屋街よりの出立」では、雑菓子業者の集中立地していた松屋町筋菓子問屋街誕生の由来、成長・成熟・衰退という産業集積のライフサイクルを繰り返した理由、菓子流通の変遷、全国菓子組合連合会の組合活動などについて述べる。

そして、松屋町筋菓子問屋街の存在の意義を論じ、なぜ消滅したのかを問う。

続く第1章は、「大正・昭和初期における雑菓子業界の発展過程と大阪菓子同業組合の創立」について論じる。雑菓子という耳慣れない言葉は、明治19年の菓子税法に登場するから随分古い言葉である。これらの商品を扱った製造者、菓子問屋たちは大阪生まれではなく地方出身者であって、いわゆるよそ者なのであった。素早く技術を習得し、零細なところから身を興し、刻苦して成功し、故郷に錦を飾ることを目標にしていた人たちであった。雑の字には万感の思いがこもっている。菓子生産品は問屋、仲卸によって公設・私設市場に持ち込まれる。消費者は大阪が工業都市だった頃の住民であり、人口移動でやってきた低所得者で雑菓子は庶民の生活の必需品だった。

第2章は、「統制経済と戦争直後期における大阪雑菓子業界の動き」と題した。昭和恐慌で大阪経済はどん底の惨状を呈するなか、菓子業界が身をすくめて暮らしている様子を業界人の手記で知ることができる。そして昭和6年頃から“非常時”が恐ろしい迫力をもって押し寄せてくる。価格等統制令が発動され60種の公定価格が決められた。戦時体制の強化により企業整備が進行する。菓子関連業者は涙ぐましい協力体制だったにもかかわらず、戦争拡大とともに製菓産業は不要不急の産業と目されてしまう。菓子業界の場合、統制経済は供給者側、需要者側の双方に何らの効果ももたらさなかった。

松屋町筋産業集積の戦後復興は驚くほど早かったが、統制制度、配給制度からの脱却には時間を要した。この間のギャップに菓子業界は苦心を重ねた。素早い戦後復興は、戦前における菓子業者と松屋町筋菓子問屋街の持つ強い吸引力がなければなし得ないことであった。

第3章は、「大阪府菓子工業組合の設立事情」である。ここでは戦後20年間における大阪府下での菓子同業組合の設立事情を論じている。利害の異なる菓子製造業者、菓子問屋、菓子仲卸、小売店を網羅した組合を設立するという困難な作業であった。業種によって問題点、利害が複雑に入り込む業界である。行政の指導も受けながら同業組合から業種別協同組合の設立へ、そして、砂糖の配給も絡んで一挙に協同組合数が増加した。分裂した組

合では満足な活動はできず、協同組合連合会も不活発な状態から工業組合への移行問題が浮上した。そして、紆余曲折の末に大阪府菓子工業組合が設立される。

第4章「高度成長期における流通近代化への対応」では、大阪雑菓子業界の1960（昭和35）年から昭和45年までの約10年間を論じる。戦後の繁栄のピークの時期を迎えて、全国的に見ても発展を遂げたとはいえ、松屋町筋菓子問屋街はこの期以降衰退への道を辿る。だが、すべての業者が衰退傾向にあったのではなく、格差の拡大が進行し、企業数は減少しながらも低成長を持続した。そして、昭和39年、40年は混乱の時期であった。人手不足、賃金高騰、物価上昇に加え、消費者嗜好の変化、食品業界による当業界への進出、流通構造の変化が大きく影響した。昭和45年頃に雑菓子業界では貿易自由化対策が焦点となっていたが、その後は資本の自由化問題が話題となっていく。貿易自由化問題に対しては菓子の大企業をはじめ中堅メーカーはよく耐えて、むしろ自社の体質を堅固なものにつくりかえることにもなったが、資本の自由化には戦々恐々とした様子が伺える。流通近代化への対応については、菓子業界はボランタリーチェーンの結成などの流通対策によって激動の時代を乗り越えようとしていた。

第5章は、「本博士論文の意義と課題」として、松屋町筋菓子問屋街がおよそ100年の間に得た7つの経験をまとめてみた。確かに松屋町筋菓子問屋街の再生という地理的な構想はもはや抱くことはできない。では、もはや大阪菓子産業集積、とりもなおさず本稿における雑菓子そのものは庶民にとって不必要なものとなってしまったのだろうか。残された研究課題なのである。

この博士論文では以上のように、松屋町筋に集積していた大阪雑菓子業界についてそれをわが国の高度成長期の時期までに限定し、主として歴史的アプローチから詳かに論じてきた。

本論文で明らかにしたことは、松屋町筋の菓子問屋街がおよそ100年の間に得た以下7つの経験である。

- ① 松屋町筋菓子問屋街が存在したことは如何に評価出来るか。
- ② 大阪の雑菓子産業集積がどのような発展過程を辿り、それがどのように衰退していったのか。
- ③ 菓子業界の戦時統制経済とは何をどうしたのか。
- ④ 菓子の産業集積は戦後復興をなし得たのか。
- ⑤ 大阪雑菓子業界における同業組合の変遷は如何なるものであったのか。
- ⑥ 貿易・資本の自由化への対応で日本（大阪）の雑菓子業界はどう動いたのか。
- ⑦ 菓子業界の近代化に菓子業者はどのように対応しようとしたのか。

本論文からの理論的インプリケーションについても簡単に触れておきたい。

第一に、雑菓子業が少額資本で経営可能となり、地方出身者においても短期間で技術を習得できることから開業が比較的容易であった。したがっていったん廃業しても再び立ち

上がることが容易であるという資本特性をもつ。さらに、雑菓子の種類の多さは、製菓技術の深化よりも消費者の目先の変化を負うのみであった。すなわち、大阪雑菓子業の再生・衰退という産業集積の変遷には、同産業での資本特性が色濃く反映していたと考えられる。また、輸入の自由化に対抗するためにも国内菓子産業の近代化が要請され、行政はこれらを支援するに際し、大量生産によって機械化、合理化の可能な製品群として、チョコレート、キャンディ、ビスケットを選択した。その他は手工業製品群としたのである。このような近代化促進過程のなかから大企業、中堅企業、零細企業の規模格差が生まれたのである。

第二に、産業集積の点からの評価として、松屋町筋菓子問屋街を初期的な産業集積と見做すことができる。雑菓子という同業種企業が集中立地している状態は「産業の地理的集中」であるが、このような現象的側面に加え、集中した企業間に縦横の取引関係、ネットワーク関係が観察され、一方で競争と協調が同時に成立している状態を現出していた。もうひとつは、起業家精神の旺盛な地域産業風土の存在が指摘できる。松屋町筋菓子問屋街においては行き過ぎた競争心も垣間みられたが、地域の人々や企業経営者相互間での協同精神、企業と住民の地域産業を共通軸とする価値共有、経営者同士の信頼関係、そして経営者と従業員の信頼関係などが存在したゆえに 100 年間集積を維持してきたと言える。松屋町筋菓子問屋街は有形・無形の社会資産であった。大阪地域の産業風土が松屋町筋問屋街の形成にも影響を与えていることが明白であり、このような固有の地域産業風土が地域経済社会の発展をもたらしたのである。

そして、残された研究課題としては以下の 3 点が指摘される。

第一に、本博士論文では時間的制約もありまとめることのできなかつた高度成長期以後での大阪雑菓子業界の変遷についても今後具体的にまとめてみたいと考える。

松屋町筋の市内問屋はほとんど廃業した。市内及び地方移出問屋は広域問屋の発展過程で格差が拡大し、競争により退出した問屋が多数に上った。地方にも大型小売店が大量出店するに及び、菓子小売店、地方菓子問屋、大阪の地方菓子移出問屋の順に衰退していった。また、広域菓子問屋も競争激化に直面し、経営効率化を成し遂げたところのみが生き残っていった。さらに、業態多様化により成立した菓子問屋も存在した。広域菓子問屋、雑菓子高級品を老舗菓子店へ卸す専門問屋、小売店主宰の菓子問屋等々である。同時に、スーパーマーケット、コンビニエンスストアの多店舗出店は量産型の菓子大メーカー、中堅メーカーに希望を与えた。

第二は、松屋町筋菓子問屋街における「集積の利益」をどのように考えるかである。明治、大正の時代において、ある程度の産業集積が形成され始めると、その集積の言わば自己増殖的優位により集積の存在自体が立地空間に「正の効果」を持つに至る。このロックイン効果により、新たな企業や関連する技能をもつ業者が引き寄せられ、ますます強い集積力をもつことになる。このような視点からも、松屋町筋に集積していた大阪雑菓子業界

についても整理・論述してみたい（石倉・藤田・前田・金井・山崎・江草『日本の産業クラスター戦略』の第6章参照）。

第三としては、同業組合、協同組合、工業組合設立の意義についてである。本論文で明らかにしたように、大阪の雑菓子業界では各種の同業組合が離合集散を繰り返し、昭和後半の時期にいたって大阪府菓子工業組合が難産の末に結成された。積極的に何もしないことが継続の要点ともなった。集まるだけで充分有意義であるとされた。政策と実運営との間に乖離があった。ただ組合は不要であったかというところではそうではないと考える。いったい同業組合発足の意義をどのように考えるべきであるのか。

論文審査結果の要旨

本論文は、松屋町筋菓子問屋街にかつて集積していた大阪雑菓子業界の歴史的変遷について、業界新聞などの関連資料を多用し、丹念に跡付けている。

ただし、全体として本学位申請論文が約 100 年間におよぶ当該業界の動きを丹念にまとめることに成功したとはいえ、それが日本（大阪）の経済産業や社会構造のなかで客観的にいかなる意義を有するののかとの観点からの分析は不十分なところが散見された。

審査委員会での意見には、例えば資本自由化が斯界に与える影響への危惧について過大視なのではないかとの意見があった。経営者として当業界にどっぷりと浸かっていることによる内部からの視点とそのことによる視点の制約が併存していたことが指摘された。経営者との思いと客観的分析が求められる研究者としての視点が時折交錯し、主観的叙述が散見されたのが惜まれる。

また、ところどころで、論理とはあまり関係のない歴史的な事柄が含まれているなどの点や西暦と和暦が未整理な部分が見られるなどの点についても指摘されたし、公設市場との関係や菓子税問題等についてのいっそう丁寧な説明が望まれるとの意見もあった。

とはいえ、我が国におけるこれまでの産業分野での研究において、本論文が分析対象とする大阪の雑菓子業界についてはこれまで全く調査研究がなされてこなかった。その意味では、本学位申請論文が当該分野での研究に先鞭をつけるものであり、その意味での功績にはきわめて大きなものがある。業界に通暁する申請者ならではの豊かな知識に裏打ちされた本論文は高く評価できると考えられる。

以上の点を踏まえ、本審査委員会では、審査委員全員の一致した見解として、本論文が、博士（地域政策学）の学位授与を可とするに十分値すると判断した。